

母語（日本語）を活かした英語学習法の開発 —気づきの双方向的な広がりをもつ—

中尾 佳行*

English Language Learning through Japanese Linguistic Abilities:
Promotion of Their Bidirectional Awareness

Yoshiyuki NAKAO*

ABSTRACT

This research note is an interim report of how English Language Learning through Japanese linguistic abilities was implemented for the students taking General English I, II, III, IV at Fukuyama University in 2019, and what effects were achieved through that method. In every lesson of the classes involved, a comparative question between Japanese and English was given to the students, followed by their answers and the teacher's additional comments (altogether ten minutes). The students were encouraged to take advantage of this linguistic awareness for their learning in the rest of the class (reading directed class). They were asked to send their reflections on their linguistic awareness through both the initial test and at a later period in the class, following their usage of the newfound linguistic awareness applied to reading study during the lesson. This was submitted through an online learner management system, Cerezo. The research questions were threefold: 1) To what degree did the students' understanding and confidence in their awareness improve?, 2) To what degree did the bidirectional awareness of both languages advance?, 3) To what degree did the awareness extend, (i.e., transfer) to their reading of other texts?

キーワード：気づき、日本語、英語、言語コラム課題、視点、認知、主語、客観、
双方向的、テキストマイニング

1.はじめに：本論の目的、背景、方法

英語の学習法は、学校教育において、文法・トランスレーションメソッド（ドリル、パタンプラクティス、訳出）、コミュニカティブ・アプローチ（オーラルコミュニケーションの重視）、アクティブ・ラーニング（4技能の統合、ペア学習、プレゼンテーション）等、言語科学の発達を踏まえ、また激動するグローバル化への対応として実践されてきた。しかし、効果的な学習法の決定打は出ていない。福山大学の一般英語教育では、1年次に英語 I, II, 2年次に英語 III, IV（各1単位）、そして3年次前期に専門英語(2単位)、計6単位が、レベルナンバーに合わせて（Iを取得しないとIIに進めないシステム）実施されている。テキ

*大学教育センター教授

ストの選定、教え方は基本的に教員に委ねられている。指導法は教員の専門性（文学、語学、文化学、教科教育など）により広げ、深められてはいるものの、一般英語の受講は、前後期とも1週間に1度の授業であり、学校教育で受けてきた授業数に比べ格段に少なく、単純に英語力のアップには繋がらない状況にある。本学ではアクティブ・ラーニングが通教科的な指導法としてはいるが、英語の場合学生の習得段階に大きく左右され（入学時に学生の英語学力は、英語プレイスメントテストにより3段階に分けられる）、下位クラスへの導入は容易ではない。アウトプットは、最低限のインプット、つまり、英語コミュニケーション基礎力（語彙力、文法力、談話構成力）がない限り、容易ではない。アクティブ・ラーニング自体が目的になって、肝心の学力に繋がっていかない危険性がある。

1週間に1度の授業形態においては、学習内容ができる限りに保持できるよう、受講生の言語に対する意識あるいはメタ言語意識（自分の言語理解はこれでよいのか、まずいのかをモニタリングする力）を高め、ひいては復習・予習等を含む自己学習に発展していく学習法が望まれる。そこで提案したいのが、日本語（母語能力）を活かした英語学習法の開発である。日本語に際立ってあるものが英語に全くないものでもないし、また英語に際立ってあるものが日本語に全くないものでもない。両言語は共通項をもちながら、それぞれ際立った特徴がある。日本語と英語の気づきが、双方向的に両言語の気づきを高め、結果、英語学習を推し進めていくのではないかと期待される。両言語の対比的特徴は、2.1で示すように、基礎学的な研究としては数多くあるが、反面、その臨床的な研究は今尚不十分であるように思える。

本稿は、母語を活かした英語学習法を本学、英語 I, II と英語 III, IV の受講生を調査協力者とし、2019年度に実践した中間報告である。毎授業の初めに10分間程度、両言語の共通点と相違点に注目させる言語コラム課題を提示し、その気づきを発表させた。教員は彼らの発表に対し補足的なコメントを加えた。そこでの気づきがセットテキスト（リーディング力を高める教材）の読解に転移するかどうかを調べた。調査協力者は、毎回言語コラム課題及びリーディングテキストを通しての気づきをウェブ上、セレッソ (Cerezo) で教員に提出した。彼らの気づきへのフィードバックは、次の授業で行い、一層の定着を目指した。この英語学習は日本語との対比で、単に表層的な違いだけでなく、発話者の事態への認識方法までも内包し、教養科目としての意義もある。更にセレッソを通しての学習は、一つのアクティブ・ラーニングを促すきっかけになるとも考えている。

第二言語習得論 (Second Language Acquisition) は、学校教育において平成31年度以降の新学習指導要領、英語コアカリキュラムに重要な柱として組み込まれている。英語と日本語の2言語がどのように影響を及ぼし合って、つまりどのような転移（正の転移、負の転移）をなして、英語習得が行われるかが注目され、その効果が期待されている。この方法論は学校教育の拡張である大学にも当てはまるものである。本学においてこの立場からの実践を行い、どのような成果と課題点があるか、一つのケーススタディを示してみたい。

2. 先行研究と研究課題

2.1. 先行研究

本研究は、母語と二つ目の言語（英語）がいかに接触し、影響を与え合うか、そのことへの気づきが英語習得にプラスに働くのではないかと、想定に基づいている。この視点に立った主要な研究は Ellis (1994) を始めとした第二言語習得論 (SLA=Second Language Acquisition) である。しかし外国語を研究する場合、常に2言語の接触があるわけで、SLA を前面に出さずとも、両言語は研究対象である。安藤(1986)の対照言語学 (Contrastive Linguistics)（音声、統語法、論理構造等の構造的な差異化）、Odlin (1989) や Gass and Selinker (1994) の転移 (Transfer)（母語の特徴が第二言語習得にプラスに影響するか、マイナスに影響するか）、

Selinker (1992)の中間言語 (Interlanguage) (第二言語学習者の母語でもなく第二言語でもなく、自律的な中間言語の作成)、池上 (2006)や中村 (2004)の認知言語学(表層構造ではなく、その背後にある認知構造の解明)、齋藤、中村、赤野 (2005)を始めとしたコーパス言語学(日英語のパラレルコーパスを含む電子化された言語資料と分析)等がそれである。

これらは異言語接触(ぶつかり合い・融合)の基礎学的な研究として大きな成果を上げてきている。しかしながら、異言語間の差異の並列的な提示に、あるいは負の転移は明らかにされても、正の転移が示唆に留まる傾向がある。母語能力を活かして二つ目の言語への気づきを高め、同時に英語の気づきを高めることが、どのように母語を振り返り、その特徴を再構築するか、といったダイナミックな研究は、必ずしも十分に行われてはいない。これまでに発掘されてきた両言語の原理・原則がいかに関人学習者に習得され、かくして再生可能なものになるかの臨床的な研究は、今尚必要であるように思える。

そこで、本学の2019年度の一般英語科目、英語 I, II (1年次生: 英語プレースメントテストで Intermediate), 英語 III, IV (2年次生: 英語プレースメントテストで Advanced) の受講生を調査協力者とし、上記の学習法を実施した。調査は2.2の研究課題を通して行われた。

2.2. 研究課題

- 1) 言語コラム課題のコンテンツにより理解度と自信度に違いがあるか。
- 2) 言語コラム課題を通して両言語の気づきは双方向的に高められるか。
- 3) 言語コラム課題の気づきは、他のテキストの理解に応用されるか。

3.方法論

3.1. 調査協力者

調査協力者は、2019年度、福山大学の一般英語、英語 I, II (人間文化学部、工学部、生命工学部の混合クラス) 及び英語 III, IV (経済学部のみ) の受講生。彼らの英語習得段階は、英語プレースメントテストにより前者 Intermediate、後者 Advanced に分類されている。

3.2. セットテキスト

英語 I, II、英語 III, IV、いずれもリーディングを重視した授業で、前者のセットテキストは Nancy Douglas and David Bohlke. *Reading Explorer 1*, Cengage, 2015、後者は Paul Macintyre and David Bohlke. *Reading Explorer 2*, Cengage, 2015。両テキストとも、内容理解(長文設問、T-F問題、概念マップ作成等)、語彙力、文法力、談話構構力が繰り返し問われている。

3.3. 言語コラム課題

1週間に1回、授業の最初の約10分間を言語コラム課題に使用した。学生の回答(気づきの記述)、発表、そして教員の補足的コメントを行った。本課題での気づきを授業後にどのように再生できるか、また直後のリーディングテキストの読解に援用できたかを調査した。後者は、学習効果に鑑み、気づきがきっかけ(cue)となって、2、3週間後の授業において、また遡及的に過去の学習法の見直しにつながることも気づきの広がりを見なした。

3.4. セレクションを使った気づきの提出(授業後から2週間内)とフィードバック

- ①言語コラム課題の理解度と自信度の申告(5段階リカーツスケール)
- ②言語コラム課題—英語と日本語の共通点と相違点—の気づき(自由記述)
- ③リーディングテキストへの気づきの応用(自由記述)
- ④気づきの記述について優れたものを次回の授業で紹介

3.5. 分析方法

- ①理解度と自信度の量的分析
- ②気づきの自由記述の質的分析
- ③気づきの自由記述のテキストマイニング（フリーソフト、User Local 等を使った分析）

3.6. 言語コラム課題の種類

言語コラム課題は、体系的・網羅的ではなく、選択的・反復的に設定。これまで何度も出てきているのに十分に意識して見ていない、つまり他の表し方もあるのに、なぜそうしていないのかを十分に認識できていない特徴を選んだ。特に発話者の事態把握の仕方に関わる問題は反復的に問うた。課題の題材は文学（小説、詩）、演説、翻訳等、様々なものから取った。

調査を始める前に、言語コラムの練習として芭蕉の俳句「古池や蛙飛び込む水の音」(1686)を例に、「英語に直してみよう。英語への気づき、また日本語への気づきを書いてみよう。」を行った。英語の特徴への気づきを促し、同時にその気づきから見えてくる日本語の特徴の見直しを促した。本稿では2019年度前期に行った英語Ⅰの言語コラム課題、下記に示す計13回に絞って報告する。

言語コラム課題 1 [2019.4.23]

川端康成：『雪国』(1948)の冒頭文について考えてみます。日本語の原典とその英語訳は、視点(誰がどこから事態を捉えているのか)の表し方にどのような違いがあるのでしょうか。またそれは何故ですか。

国境の長いトンネルを抜けると、雪国であった。

The train came out of the long tunnel into the snow country. (E. Seidensticker 1996 訳)

言語コラム課題 2 [2019.5.7]

小学生が次のように英語を言いました。I go to school at eight.別の小学生が先生に質問しました。8時は学校に着く時間ですか。家を出る時間ですか。皆さんはどのようにこの質問に答えますか。

言語コラム課題 3 [2019.5.14]

英語の前置詞は日本語のどの品詞に対応するだろうか？

[1] 英語に直しなさい：そのこと(the thing)を鉛筆を使って書きなさい。

[2] 日本語に直しなさい：The ship sunk with a loss of a lot of people.

He was standing with his back against the wall.

言語コラム課題 4 [2019.5.21]

一つの語(over)には沢山の意味があります。でも何かそれぞれは関係し合っていて共通項があるように思えます。それを指摘しなさい。またそれぞれを日本語に直すとどのようなになりますか。

He jumped over the fence.

He stayed in Tokyo over the holiday.

He chatted with her over a cup of coffee.

He thought it over.

言語コラム課題 5 [2019.5.28]

次の英文は2016年5月27日のオバマ前大統領の広島スピーチです。下記の問いに答えなさい。

Seventy-one years ago, on a bright, cloudless morning, death fell from the sky and the world was changed. A flash of light and a wall of fire destroyed a city and demonstrated that mankind possessed the means to destroy itself.

Why do we come to this place, to Hiroshima? We come to ponder a terrible force unleashed in a not so distant past. We come to mourn the dead, including over 100,000 in Japanese men, women and children; thousands of Koreans; a dozen Americans held prisoner.

[1] 下線部の表現の意味合いについて気づきを述べなさい。

[2] 第二段落では一貫して I ではなく we が使われています。何故でしょうか。

言語コラム課題 6 [2019.6.4]

A rolling stone gathers no moss. はよく知られた格言です。しかしこの解釈は単純ではなく、真反対の意味が含まれています。その意味合いを説明しなさい。また日本語の「転石苔むさず」の意味合いはどうでしょうか。

言語コラム課題 7 [2019.6.11]

アメリカに留学した大学生がパーティで「チキンを食べた」と英語で日本にいる大学の英語母語話者の先生にメールで知らせました。“I ate a chicken.” 日本にいる英語の先生はびっくりしました。何故でしょうか。

言語コラム課題 8 [2019.6.18]

日本語では、「コメ」を表す語彙は、苗、稲、粳、ご飯、米など、多岐にわたります。また親族関係でも兄、弟、姉、妹と分けて言います。しかし英語では、「コメ」は rice のみ、ご飯を言おうとすれば cooked rice のように言わないといけません。つまり語がありませんので。兄弟、姉妹は、brother, sister でオッケーです。big brother, little brother とも言いますが。語の区別・数の違いは、どうして起こるのでしょうか、理由を考えてみましょう。

言語コラム課題 9 [2019.6.25]

清少納言（1025年頃平安中期の女流詩人）、『枕草子』の冒頭行、「春は曙」を英語に直してみましよう。「曙（あけぼの）」の英語は dawn です。

言語コラム課題 10 [2019.7.2]

日本語の「りんご好き？」—「好きよ。」を英語に直すと、“Do you like apples?”—“Yes, I do. I like them.” のようになります。ここには日本語と英語のどのような違いがあるでしょうか。

言語コラム課題 11 [2019.7.9]

宮澤賢治。「雨ニモマケズ」（昭和6年11月3日）の詩とその3種の英訳を、語り手（話者）の表し方に着目して、比べてみましょう。英訳にはどんな違いがありますか。（最初の13行）。

雨にも負けず
 風にも負けず
 雪にも夏の暑さにも負けぬ
 丈夫なからだをもち
 慾はなく
 決して怒らず
 いつも静かに笑っている
 一日に玄米四合と
 味噌と少しの野菜を食べ
 あらゆることを
 自分を勘定に入れずに
 よく見聞きし分かり
 そして忘れず

野原の松の林の陰の
 小さな萱ぶきの小屋にいて
 東に病気の子供あれば
 行って看病してやり
 西に疲れた母あれば
 行ってその稲の束を負い
 南に死にそうな人あれば
 行ってこわがらなくてもいいといい
 北に喧嘩や訴訟があれば
 つまらないからやめろといい
 日照りの時は涙を流し
 寒さの夏はおろおろ歩き
 みんなにでくのぼーと呼ばれ
 褒められもせず
 苦にもされず
 そういうものに
 わたしはなりたい

Pulvers (2008)

Strong in the rain
 Strong in the wind
 Strong against the summer heat and snow
He is healthy and robust
 Free of all desire
He never loses his generous spirit
 Nor the quiet smile on his lips
He eats four go of unpolished rice
 Miso and a few vegetables a day
He does not consider himself
 In whatever occurs...his understanding
 Comes from observation and experience
And he never loses sight of things....
 That is the sort of person
 I want to be

against=～に対して
 healthy=健康的、robust=強靱で
 free of ...=～から逃れて（自由になって）
 generous=寛大な
 nor=また～も～しない
 unpolished=精米されていない
 a day=1日につき
 consider himself=自分のことを考慮する
 in whatever occurs=どんなことが起ころうと
 comes from=～からくる、observation=観察
 sight=視力

Iwata, et al (2011)

Unbeaten by rain
 Unbeaten by wind
 Unbowed by the snow and the summer heat
 Strong in body
 Free from greed
 Without any anger
 Always serene
 With a handful of brown rice a day
 Miso and a small amount of vegetables
 Whatever happens
Consider yourself last, always put others first
Understand from your observation and experience

beat=打つ、unbeaten=打たれない
 bow=屈する（お辞儀する）[bau]
 free from=～から逃れている
 without=～無しに、anger=怒り
 serene=穏やか
 with=～を持って（食べて）
 suffice=～で十分である
 whatever happens=何が起ころうと
 consider yourself last=あなた自身ことは
 最後に考えよ

Never lose sight of these things....
 Such a person I want to be

never lose ...=決して見失うな（命令文）

Youtube: <http://www.youtube.com/watch?v=AieSqkpawG4>

I will not give in to the rain.
I will not give in to the wind
I will have a healthy body

give in=～に屈する

that won't give in to the snow or to summer's heat

that は関係代名詞

<u>I will not have desire.</u>	
<u>I will not get angry.</u>	get angry=怒る、怒った状態になる
<u>I will always be smiling quietly.</u>	smile=笑みを浮かべる、cf. laugh=朗々と笑う
<u>I will eat four cups of brown rice,</u>	brown rice=玄米
miso and a bit of vegetables each day.	a bit of=ほんのわずかの each day=各々の日
<u>I will not count myself.</u>	count myself=自分のことを勘定に入れる
<u>I will look, listen and understand well,</u>	listen=耳をそばだてて聞く、Cf. hear=耳に入ってくる
<u>And I won't forget. ...</u>	
This is the person	
I want to be.	

言語コラム課題 12 [2019.7.16]

次の単語は 1970 年代以降、科学技術、環境問題、人種・性・差別などの社会状況との関係で新たに生み出されました。その意味を書きなさい。

- [1] netizen, [2] surrogate mother, [3] brain death, [4] eco-friendly, [5] e-ticket, [6] ungreen, [7] physically challenged (< handicapped), [8] African-American people (<Black people), [9] chairperson (< chairman), [10] fire fighters (< firemen), [11] cabin (flight) attendant (< stewardess), [12] Native American (< Indian)

また日本語にもそのような言語変化の影響がありました。1、2 例を挙げてみなさい。

言語コラム課題 13 [2019.7.23]

松尾芭蕉：古池や蛙飛び込む水の音（1686）を英語にすると、どんな表現になりますか？その時、英語と日本語のどのような違いに気づきますか。

3.7. セレッソ上における言語コラム課題（英語 I: 2019.4.23 の例）

1. 理解度

1. よく理解できた
2. 殆ど理解できた
3. なんとも言えない
4. あまり理解できなかった
5. 全く理解できなかった

2. 自信度

1. 自信がある
2. かなり自信がある
3. なんとも言えない
4. あまり自信がない
5. 全く自信がない

3. 言語コラム（気づき）

川端康成：『雪国』（1948）の冒頭文について考えてみます。日本語の原典とその英語訳は、視点(誰がどこから事態を捉えているか)の表し方にどのような違いがあるでしょうか。またそれは何故ですか。

国境の長いトンネルを抜けると、雪国であった。

The train came out of the long tunnel into the snow country.

(E. Seidensticker 1996 訳)

4. リーディング (気づき)

4. データと考察

4.1. 言語コラム課題のコンテンツにより理解度と自信度に違いがあるか

英語 I の受講者 42 名のうち、セレッソによる 13 回の課題提出者は表 1 の通りである。

表 1: 言語コラム課題 13 回の提出者

回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
提出者	36	37	38	35	37	36	37	33	34	32	34	35	29

提出者の理解度と自信度の組み合わせ頻度、Top 3 は表 2 の通りである。

表 2: 理解と自信度

理解度— 自信度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
Top 1	2-3 (18)	2-3 (4)	2-3 (8)	2-3 (9)	2-3 (10)	3-3 (13)	3-3 (11)	3-3 (13)	3-3 (9)	3-3 (12)	3-3 (10)	3-3 (13)	2-3 (8)
Top 2	1-2 (4)	3-3 (7)	2-2 (7)	3-3 (8)	3-3 (10)	3-4 (5)	2-3 (9)	2-3 (8)	2-3 (7)	2-3 (5)	2-3 (8)	2-3 (7)	3-3 (7)
Top 3	3-3 (4)	1-2 (5)	3-3 (7)	2-2 (4)	2-2 3-4 (3)	2-2 2-3 (4)	2-2 (5)	2-2 (3)	2-2 (4)	2-2 (4)	2-2 (6)	2-2 (5)	2-2 (5)

注: 横のコラムは、言語コラム 1 回~13 回、縦のコラムは、理解度と自信度のペア、トップ 3 を示す。

() は人数を示す。1 回目の Top 1 は、2-3 (理解度は 2. 殆ど理解できた、自信度 3. なんとも言えない) が 18 名いることを表す。

理解度と自信度との関係は、Top からの 3 つを見ていくと、一定の傾向がみられる。Top 1 では、理解度は 2 (6 回)、3 (7 回)、自信度は理解度 2 の場合は 1 下がって 3、理解度 3 の場合は、自信度も 3 で平行している。Top 2 では、理解度は 1 (4 回)、2 (7 回)、3 (4 回)、自信度は、理解度より多くが 1 下がっている。理解度に平行するものは 3 (4 回)、2 (1 回) である。Top 3 は、理解度と自信度が 2-2 で平行するものが 10 回、3-3 で平行するもの 2 回、他は理解度が 1、自信度 2 である。しかし、13 回の言語コラム課題のコンテンツにより、顕著な違いは見られない。基本的にはリカートスケールの中央値近くに揃った。理解度は、「殆ど理解できた」、「なんとも言えない」に、他方、自信度は 1 つ下がって、Top 1 と Top 2 では「なんとも言えない」に集まった。学習してすぐに納得し、すぐに応用は通例起こりにくく、当然の結果と言えるかもしれない。

言語コラム課題 1~13 の自由記述は、理解度と自信度が 3 周辺にある故か、気づきの記述にばらつきが見られた。気づきの部分的な指摘から、本質を踏まえた論理的な叙述まで多岐にわたった。

4.2. 言語コラム課題を通して両言語の気づきは双方向的に高められるか

毎授業の言語コラム課題での気づきをまとめたものがセレッソを通して提出した自由記述である。気づきは学習を通じた結果であって、必ずしも自分で考え出したものではない。ここで求められる力は 2 つある。学習で学んだ自分の気づきを再生する力、そしてその気づきを論理的にまとめるナラティブ (story telling) の力である。両者は相まって、自分の感じ方

や考え方をメタ認知し、学習者の思考を深めたり、広げたりする一つのきっかけになる可能性がある。

本稿では、一人の調査協力者（A と呼ぶことにする）の気づきに焦点を置き、13 回の言語コラム課題ごとに紹介する。13 回の言語コラム課題を全て記述、提出し、相対的によくまとめていることから選んだ。A は、日本語が容易には英語に直せないことから、両言語をすり合わせ、双方向的にそれぞれの特徴に気づいていくプロセスが見られた。言語コラム課題のコンテンツが違い、A の気づきの経時的・段階的な変容は精確には捉え難いが、課題をこなすごとに、この学習法に馴染んでいく様子が窺えた。42 人全員が A のレベルではないが、このような学生のいることは、本英語学習法の効用の一面を示したと言えるのではないだろうか。

言語コラム課題 1

日本語の場合だと、どちらかという主人公を電車の中から捉えた文であるように読み取れる。主語が電車に限定されていないからだ。日本語は読み手の感じ方次第で視点を電車の外とも捉えられるような奥ゆかしさが出せるため主語を明らかにしないのだ。一方で英語の場合は主語が電車であることから、主人公の様子を電車の外から客観的に捉えている。あえて電車を主語にして固定することで読み手にわかりやすく伝えることができるからだ。

言語コラム課題 2

go は案外抽象的な単語なんだと思った。前回の授業で先生が仰っていたように、簡単な単語ほど意味が理解しにくいのがよく分かった。arrived や leave を使うことで学校に着く時間か家を出る時間かを区別できるが、小学生の英語の為に区別することが難しいのだと、また英語の奥深さを学んだ¹。

言語コラム課題 3

英語の前置詞は、重要なことが多いため日本語の動詞のような働きをする。
1. Write the thing with a pencil.
2. 舟が沈んでいく多くの人々の死をもたらした。

言語コラム課題 4

ある物乗り越えるというようなイメージで捉えると上手く訳せるようになっている。
訳:彼は飛んでフェンスを乗り越えた。
彼は東京に短い間滞在している。
彼はコーヒーを飲みながら彼女と話す。
彼は熟考した。

言語コラム課題 5

1)多くの犠牲者を出した原子爆弾が空から降ってくるため、このような表現をしたのかと思った。それとは他に fall という単語を使うことで、自然に起こった事のように表現することで人間がやったのではない。というような意味も少なからず含まれているように感じた。
2)we には世界の皆に原爆の恐ろしさを知ってもらいたいという思いが込められているのではないのかと思った。もし「I」の場合この恐ろしい原爆を世界の皆に二度と起こってはならないと伝えきれないと考え、「we」にすることでこの問題は世界の問題だと認知してもえらと思ったから。

言語コラム課題 6

良い意味:色々な考えをもつことで成功する
 悪い意味:ころころ考えを変えていては成功しない
 日本語の意味は、世の中に合わせ行動を軽々しく変える人は結局成功しないということ。

言語コラム課題 7

チキンを丸ごと一匹食べたようになってしまうから。英語では、可算名詞と不可算名詞を凄く気にかけていないとびっくりされてしまう。a **peace of** [ママ (sic)]を使うことによって丸ごと一匹たべたようにはならなくなる。

言語コラム課題 8

区別をする必要がないとその国の人たちが思ったから、国によって語の区別・数の違いは起こると思う。
 もしくは、歴史や文化によってその語に対する想いや重要性が違うため、語の区別・数の違いは起こると思う。

言語コラム課題 9

春は曙を英語に直すと、**In spring it is the dawn that is most beautiful.**
Spring is dawn.のように「～は」をそのまま is としてしまおうと、春=曙というような感じに捉えられる。そのためニュアンスが全然違うようになってしまう。

言語コラム課題 10

日本語は主語などがなくてもわかるでしょ?というような友達同士で話しているような感じである。良く言えば、人間関係が深い。悪く言えば、鎖国主義である。
 英語は少し距離感がある。世界には様々な思想があるためこの程よい距離感が、公用語に使われやすくなっていると思われる。

言語コラム課題 11

雨にも負けずの部分の主語が、「I」と「you」「he」でそれぞれ訳されている。日本語では主語がはっきりしていないので、英語に訳す人の感性で日本語の内容が少し左右されていることがわかった。

言語コラム課題 12

1.ネット民、2.母親の代わり、3.脳死、4.環境に優しい、5.電子航空券、6.環境に無関心、7.障害者、8.黒人、9.議長、10.消防士、11.客室乗務員、12.先住民、ネイティブアメリカン
 看護婦がに[ママ]看護師という呼び方に変わったり、女々しいのような元々は差別的な用語では無[ママ]かったものもある。

言語コラム課題 13

Old pond / Frogs jumped in / Sound of water.
 蛙が単数か複数がわからないため松尾芭蕉が伝えたかったものは厳密には伝えられてはいないようになっていることに気がついた。

以上のように、調査協力者 A を取り上げ、言語コラム課題 1～13 の気づきを紹介した。全て提出していることから、本気で取り組んでいると言えよう。記述に長短があり、その精度にも多少の違いがあるが、他の調査協力者に比し、安定してまとまりのある記述であると評価した²⁾。

4.3. 言語コラム課題の気づきは、他のテキストの理解に応用されるか

調査協力者 A は、授業のリーディングテキストのみに関係した気づきの記述が多く、言語コラムの気づきを活かした応用的な気づきは少なかった。リーディングにおいてはそのテキストの読解指導に重点を置き、念入りに言語コラムの気づきと関連付けなかったのが要因だろう。A は、言語コラムとリーディングテキストそれぞれの文脈に合わせて、独立的に気づきをまとめていた。言語コラムの文脈から少し離れて抽象的に気づきをリーディングテキストに広げてほしかったが、それは殆ど見られなかった。気づきの学習効果を直後に期待すること自体に無理があったのかもしれない。しかし、言語コラムの気づきが **cue** となり、今までの英語の学習の仕方そのものに広げ、見直したのは、拡張（応用）の一面と言えるかもしれない。2,3 紹介してみよう。

言語コラム課題 1

[リーディングテキストに限定した気づきだが、文法及び語彙のポイントを鋭く捉えている。筆者による評価。以下も同様。]

文章を上手く翻訳するとき問題文の単語を覚えておくことは勿論のことだが、僕が特に重要だと思ったことは2つある。1つ目は、問題文を翻訳するとき TO に気を付けることだ。TO を見たときは、未来に関するものの文章になっている。このことを覚えておくと文章のイメージが読み取りやすくなるのだと気づいた。2つ目は、簡単な単語単語 [ママ] ほど翻訳するとき難しいということだ。例えば、似たような意味の **get** と **become** だ。**get** は瞬間的に、**become** は継続的という細かな違いがあるのだ。この2点によく気を付けて文章を上手く翻訳していきたいと思った。

言語コラム課題 2

[言語コラムにおいて子供の習慣が現在時制で表されているが、現在時制をその本質的特徴“timeless”へと広げている。]

時制はとても分かりにくいものだと痛感した。現在形で書いてあるけど過去と未来のことも含めた現在形のことがある。変わらない事実であることも同じように、過去と現在と未来は常に変わらない為に現在形を用いる。単純に現在形だから現在のことではないということに注意して文をしっかり捉えていきたいと思った。

言語コラム課題 9

[リーディングテキストでの気づきだが、「言語力」、「思考力」、「英語力」というメタ言語に言及していることは注意に値する。]

音楽をすることで言語力を高め、そして思考力が高まる。というような経験をしたことは無かったので、実際どうかはわかりませんが小さい時から洋楽に触れていたらもっともって英語を好きになっていたのかなあ。と、思いました。まだまだ英語の授業を受けていて、思い出せない単語や熟語があるので今日も出てきた、分詞構文の文章などを沢山読んで英語力を高めていきたいです。

言語コラム課題 11

[リーディングテキストでの気づきだが、何故当該語が選ばれ、その背後の意味とは何なのかを、範列的 (paradigmatic) に深めている。]

今日学んだことは2つある。1つ目は、どのような生命体かわからないから **being** を使っている。2つ目は、あえて **may** や **might** を使うことによって、はっきり言うのではなく文章をぼかしている。この法助動詞を使うことは英語上達の最終段階であるということがわかった。

言語コラム課題 13

[調査前にリハーサルで扱った「古池や蛙飛び込む水の音」の英語訳を再度問うたが、Aは、言語コラムを「高校生とはまた違った英語」と総括している。]

大学英語では高校生とはまた違った英語に触れ合う意味でも、授業の中の言語コラムをこれからも真剣に考えて取り組んでいこうと思った。

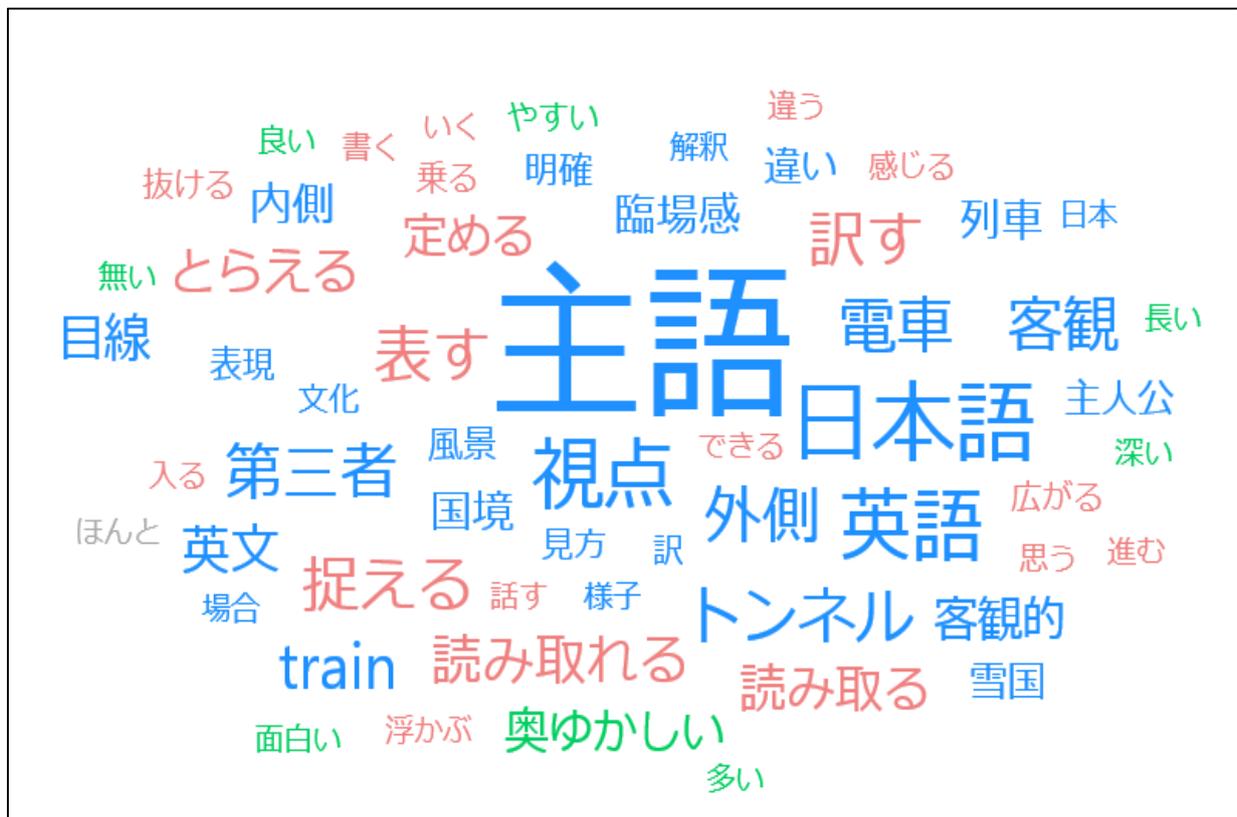
以上、調査協力者 A は、言語コラム課題のリーディングテキストへの応用において、直後ではその効果は見られず、大半は読みを精確にするための文法項目のメタ認知であった。しかし気づきがきっかけとなって、言語コラム 2, 11, 13 に窺えるように、A の学習方略そのものの見直しに繋がったことは注目してよからう³。

4.4. テキストマイニング、User Local [URL: <https://textmining.userlocal.jp/>]を使用した分析：言語コラム課題 1 の場合

テキストマイニング、User Local を使用して、言語コラム課題 1 の提出者、36 名分を分析した。調査協力者が当該課題をどのように記述しているかを、その使用語彙に着目し、下記の 5 つの視点から可視化を試みた。日本語の気づきと英語の気づきがキーワード・関連語を通して、双方向的に連鎖していくことが、鳥観図的に観察され、研究課題 2 の調査を補完できた。1～5 の視点の説明は、User Local に基づき多少の編集を加えたものである。

1) ワードクラウド

スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示している。単語の色は品詞の種類で異なっており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞、灰色が感動詞を表している。



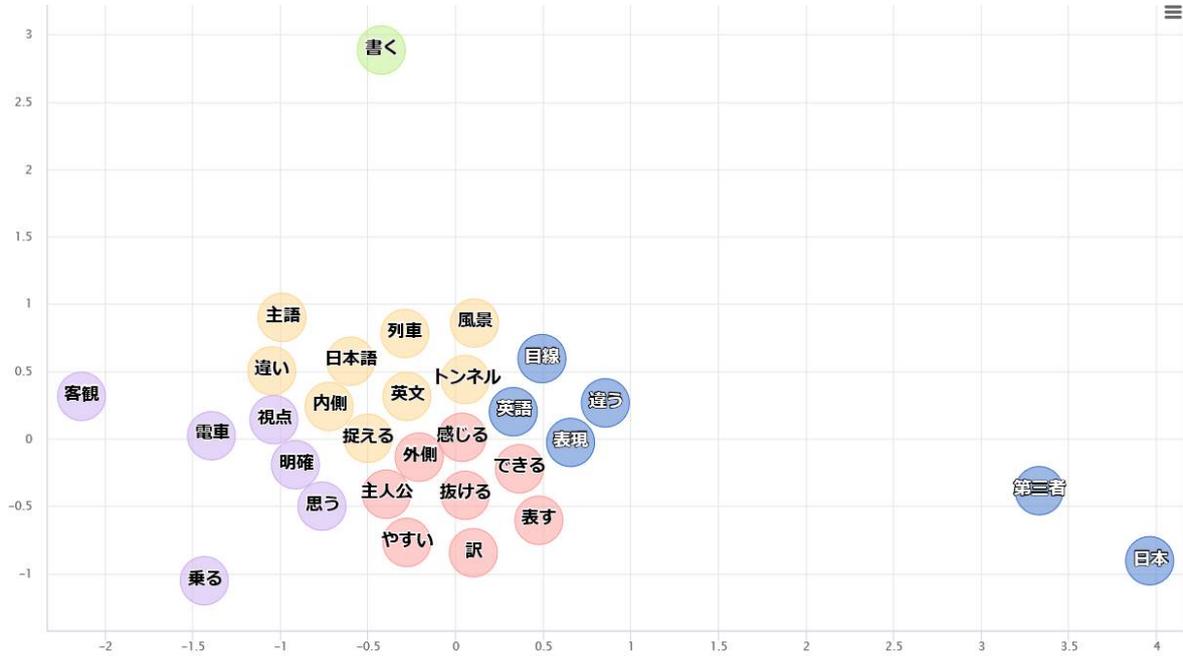
2) 単語出現頻度

文章中出现する単語の頻出度を表にしている。単語ごとに表示されている「スコア」の

文章中出现する単語の出現パターンが似たものを線で結んだ図。出現数が多い語ほど大きく、また共起の程度が強いほど太い線で描画される。

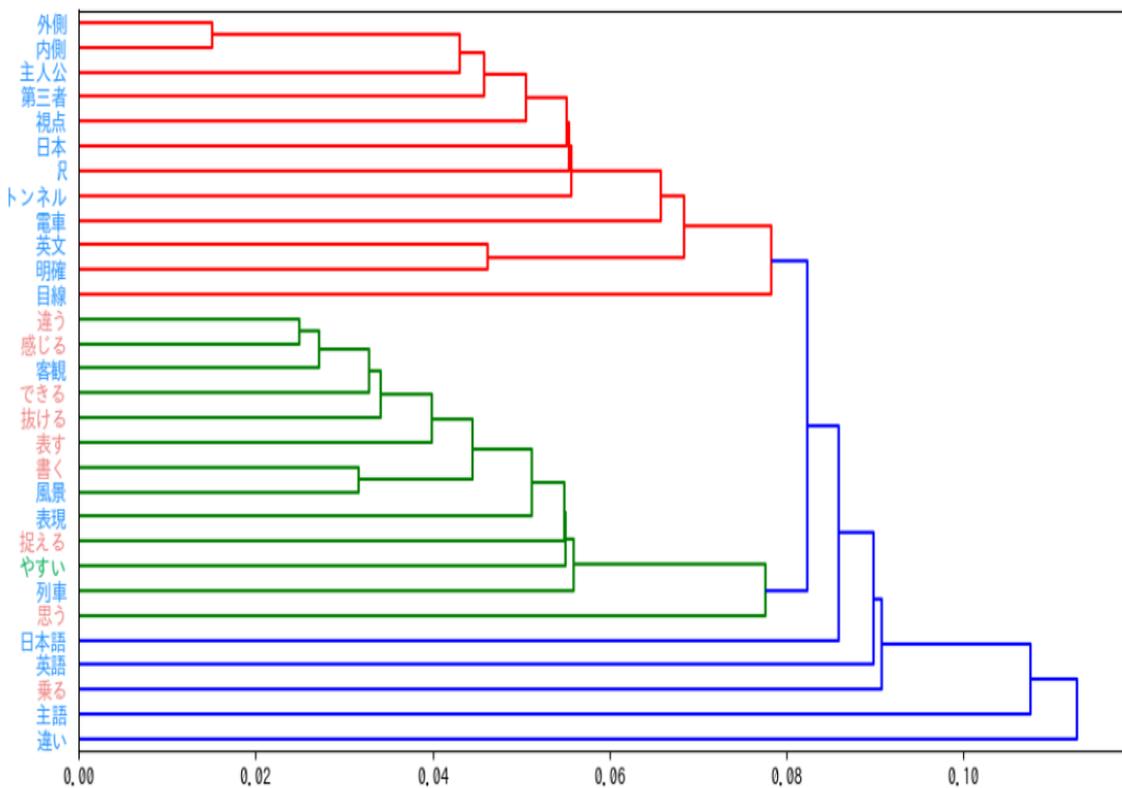
4) 2次元マップ

文章中での出現傾向が似た単語ほど近く、似ていない単語ほど遠く配置されている。距離が近い単語はグループにまとめ、色分けしている。



5) 階層的クラスタリング

文章中での出現傾向が似た単語をまとまりとしてとらえられるよう樹形図で表したもの。グループは色分けして表示している。



1)ワードクラウドでは、「主語」、「電車」、「客観的」が、また「視点」、「外側」、「英語」は、重要度が高い語として隣接している。これは英語の気づきの特徴を示唆している。2)単語出現頻度において、「日本語」（45）、「英語」（41）、「電車」（39）、「主語」（37）、「視点」（22）が高頻度であるが、日英語の気づきを分けるキーワードが現れている。3)共起キーワードは、「電車」と「主語」、「英語」と「日本語」が最も際立った共起性を表している。4)2次元マップでは、「電車」、「視点」、「明確」が近寄り、「主語」、「遠い」が近寄り、また「日本語」、「内側」が近寄っている。5)階層的クラスタリングでは、例えば、「外側」、「内側」が一つのグループに属し、その上位で「主人公」に組み入れられ、もっと上位では「第三者」、更に上位では「視点」とグループ化されている。User Local の分析は、日英語の気づきを記述・説明していく時のキーコンセプト、及びそれを手がかりにした凡その思考過程を浮かび上がらせてくれている⁴。

5. おわりに

2019年度一般英語科目、英語 I, II, III, IV の受講者を調査協力者として母語を活かした英語学習法の開発を試みた。本稿は、英語 I に絞り、しかも調査協力者 A を中心に開発から見てきた結果の一端を報告した。またテキストマイニング、User Local を用いて、言語コラム課題 1 提出者全員（36名）の分析を示した。現段階での調査結果を以下に簡単にまとめる。

研究課題 1「言語コラム課題のコンテンツにより理解度と自信度に違いがあるか」については、理解度も自信度も中央値 2 ないし 3 に集中した。自信度の方が、理解度に対し 1 程度低い傾向を示した。「なんとも言えない」の反応故か、研究課題 2 と研究課題 3 の記述は、部分的で断片的な記述から、論理的で詳細なものまでばらついた。初めて気づいたことは習熟に至らず、もちろんすぐに他に応用するには抵抗があったろう。データはこのことを正直に示唆しているように思える。

研究課題 2「言語コラム課題を通して両言語の気づきは双方向的に高められるか」は、調査協力者 A を例に、その精度には差があるものの、両言語の特性に気づき、その間を行き来しながらいかに言語理解を深め、広げていっているかを紹介した。英語 I で見える限り、A のように気づきを記述できる調査協力者は少ないが、気づきのフィードバックをもっと精緻に行い、学習態度を揺り動かしていたら、その人数をもと増やしたかもしれない。

研究課題 3「言語コラム課題の気づきは、他のテキストの理解に応用されるか」は、調査協力者 A においても十分に確認できなかった。リーディングテキストを使った授業で、言語コラム課題の気づきを意識的に再確認しなかったのが、一因であろう。もっと深刻には、言語コラムの文脈から少し切り離して、抽象化し、他のテキストに広げること自体が、理解度が大きく問われるわけで、直後の応用には至らなかったのであろう。しかし、気づきがきっかけとなって、しばらく後の授業で応用できたり、また 4.3. 言語コラム課題 13 で見えるように、これまでの学習方法のメタ認知にも広がったことは無視できない。

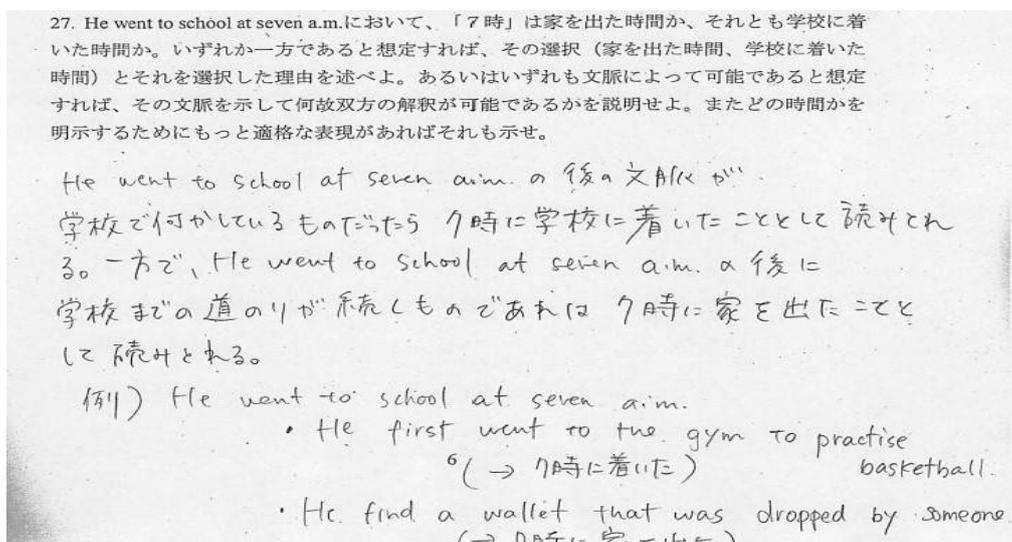
テキストマイニング、User Local の使用において、言語コラム課題 1 の調査協力者（36名）の記述言語を可視化することができた。日本語と英語の気づきを分けるキーコンセプト、両言語の近さ、遠さ、そして気づきをまとめる際の思考過程が、凡そではあるが、浮かびあがってきた。

気づきの高まりが、即、言語使用に至るわけではない。しかしそれは学習者のモチベーションを高め、自己学習力をアップさせる可能性がある。本学習開発が言語習得に向けての一つのきっかけとなることが期待される。今後は、2019年度、英語 I の課題提出者全員の比較検討、更には英語 II, III, IV も検討対象とし、母語を活かした英語学習法がどの程度に効果的であるのか、量的かつ質的にその調査を広げ、深めていきたい。

*2019年度 教育振興助成金(特色ある教育方法開発助成金)、課題名「日本語(母語能力)を活かした英語指導法の開発」の研究成果の一部である。セレッソによる問題作成、セレッソ上のデータ、エクセルファイルの処理方法、必要データの画像処理については、本学大学教育センターの日暮美紀先生にご助言・協力を頂いた。調査手法では記谷康之先生、テキストマイニングの使用については、脇忠幸先生のご助言を得た。英語能力のデータでは Warren Tang 先生、日本語能力のデータでは竹盛浩二先生から有益な情報を得た。ここに記してお礼申し上げます。

注

1. 某大学の専門科目「教育英文法」(3年次生開講)で同様の実験をした(2015年2月10日実施)。「家を出た時間」か「学校に着いた時間」かについて、受講生は、前後の文脈を付して具体的に記述している。



私は両方可能だと考える。
 (A) <家を出た時間の場合>
 夫: Why isn't Tom here? Tom → 息子。
 妻: He went to school at seven a.m. 朝の7時に学校へ行った。
 (B) <学校に着いた時間>
 先生: When did Tom come to school? 夫A → 学校へ早く来た。
 夫A: He went to school at seven a.m. 来た。
 私の例で例として。Aは自然なBは少し不自然かもしれない。
 Bの文脈で、He came too. にもよる。より自然に感じる。
 Aでは、He left for school. にもよる。より自然に感じる。

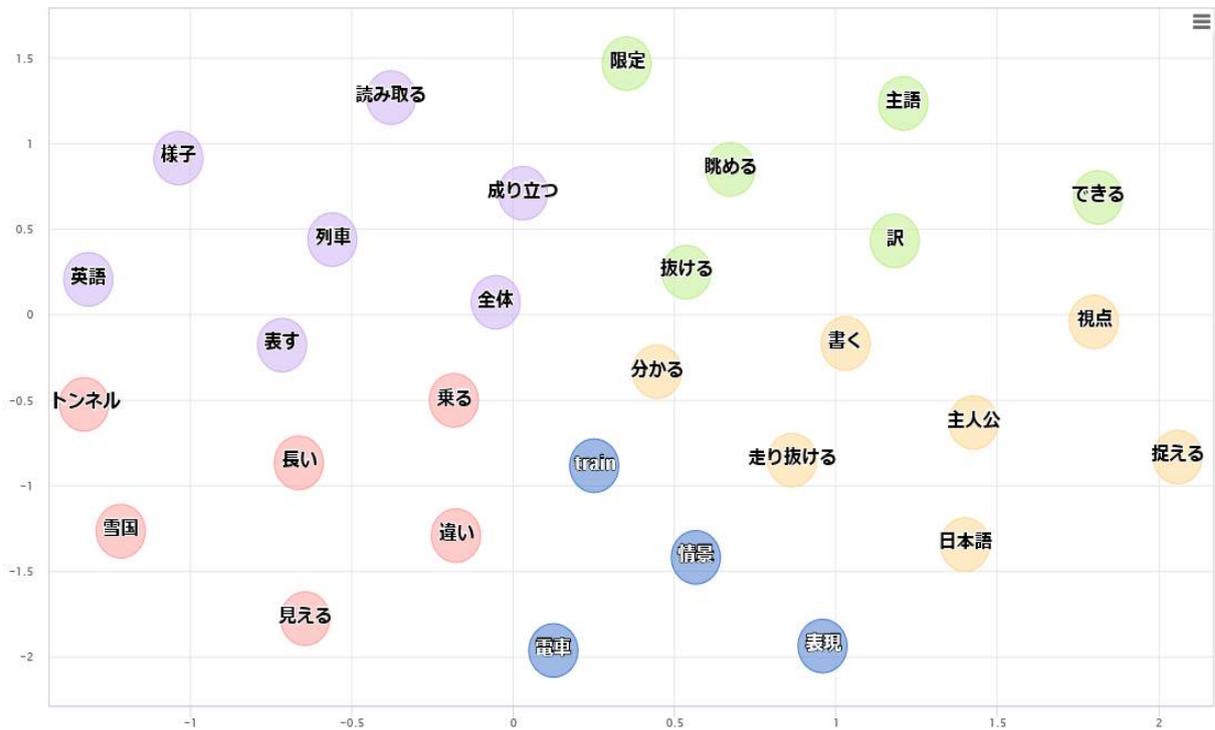
2. 言語コラム課題1について、他の調査協力者による短い記述例を紹介する。

- 主語があるかないか、英語は第三視点
- 主語が日本語にはない。英語には主語がある。
- 日本語は主観的で共通の理解で主語がないが英語は客観的で必ず主語が入っている。
- 日本語原典は電車に乗っている乗客の目線で、英語訳は電車の目線で表してある。
- 日本では一人称視点で書かれているけど、英語だと第三者視点で書かれている。

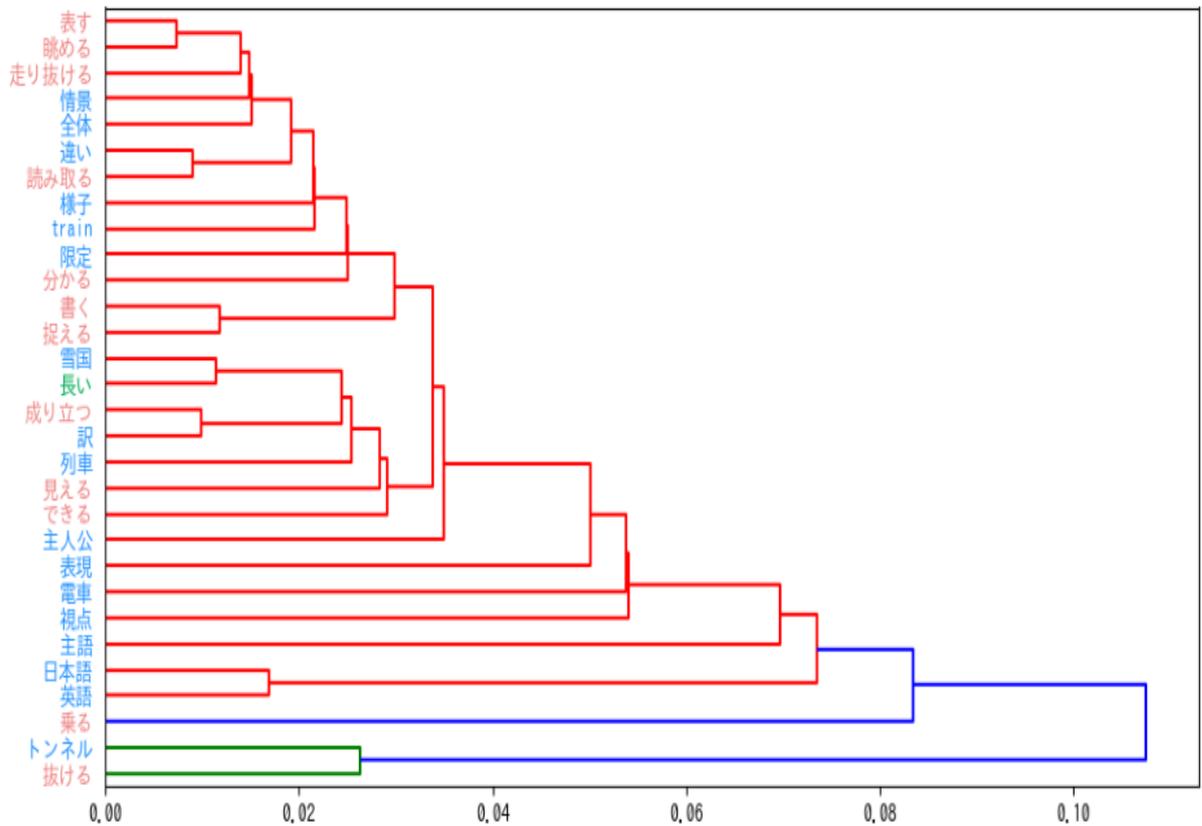
3. 言語コラム課題1について、言語コラム課題の気づきをどのように、授業に、更には学習法に広げているか、他の調査協力者の例を紹介する。

- 日本の俳句などではほとんど主語がない場合が多く、日本人の私でさえ困惑してしまい

4) 2次元マップ



5) 階層的クラスタリング



参考文献

- 安藤貞雄. 1986. 『英語の論理・日本語の論理』東京：大修館書店.
- Ellis, Rod. 1994. *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Gass, Susan M. and Larry Selinker. 1994. *Language Transfer in Language Learning*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 池上嘉彦. 2006. 『英語の感覚・日本語の感覚—<ことばの意味>のしくみ』NHK Books [1066] 東京：日本放送協会.
- 文部科学省. 2018. 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』
- 文部科学省. 2019. 『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 外国語編 英語編』
- 中村芳久. 2004. 「第1章「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」『認知文法論II』東京：大修館書店、pp. 33-48.
- Odlin, Terence. 1989. *Language Transfer: Cross-linguistic influence in language learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Selinker, Larry. 1992. *Rediscovering Interlanguage*. London: Longman.
- 「雨ニモマケズ」[URL: <http://www.youtube.com/watch?v=AieSqkpawG4>] (閲覧日: 2020.2.17)
- テキストマイニング、User Local [URL: <https://textmining.userlocal.jp/>] (閲覧日: 2020.1.19)